

耐震性防火水槽設置に伴う

若江遺跡第83次発掘調査概要

2005年9月

東大阪市教育委員会
東大阪市消防局

I はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯に広がる弥生時代から安土桃山時代にいたる複合遺跡である。昭和9年(1934)旧補模川改修工事の際に、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が採集され、遺跡の認識が始まった。昭和47年(1972)、市立若江小学校校舎増築工事に伴う第1次調査が開始されて以降、今回の調査で83次を数える。現在東西約750m、南北約1000mの範囲に推定されている。本遺跡が現今の大串川・楠根川ないしその前身河川が形成する自然堤防や微高地に上に立地し、先史以来変遷・累重してきた経緯から、東大阪市の中部域にあって、各時期の遺構面が現地表面から浅いレベルで検出されることになり、多くの調査例が蓄積してきた。

東大阪市消防局は、平成16年度の耐震性防火水槽設置工事を行なうこととなり、設置場所を若江本町2丁目の若江本町北公園に予定された。当該地は周知の若江遺跡内にあたることから、消防局と市教育委員会は直ちに取扱いについて協議に入った。同年6月、文化財保護法に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。掘削底面が地表下約5mで当該工事の施工により、埋蔵文化財の破壊が予想された。このため事前の発掘調査を実施することで双方合意した。後述する付近の調査成果から中世期の遺構面が遺存することが確実視されたため、確認(試掘)調査は実施しなかった。発掘調査に向けての協議を行ない、平成16年2月12日から2月18日まで事前調査を実施した。

既往の調査成果のうち、中世期の若江遺跡を摘記してみたい。室町時代に若江城が築造される。これまでの研究により、若江城は第1期若江城・第2期若江城に区分されることが判明している。第1期若江城は、室町時代中期、畠山氏が河内国支配の拠点とした守護所が設置された城館である。第2期若江城は、三好長慶の義姫によって築かれ、その後義姫を滅ぼした織田信長が石山本願寺攻めの中心地として



第1図 若江遺跡第83次調査地とその周辺

使用された城郭である。織田信長が石山本願寺と和睦したのち、ほどなく若江城は陥落したようで、城の建物・施設は破却された。主郭は現在の市立若江幼稚園を中心に、幅25mの濠で区画された内部、東西約150m、南北約170mの矩形を呈する。若江城は、以前の集落や寺院を再編成して築造されている。とくに第2期若江城においては、主郭から放射状に広範囲にわたって整地を行なうため、該期の中世期遺物に混在して、量質ともに農業奈良一平安時代・古墳時代の遺物が認められるところである。

さらには若江庄の存在も見逃しがたい。国史上には、醍醐寺領・石清水八幡宮領・興福寺領若江莊と見える。醍醐寺領は10世紀末から12世紀にかけて国役雜事職課の免除申請を行なう。石清水八幡宮領は11世紀後半に若江北条に皿地を有している。興福寺領は12世紀前半から經華寺料所としてしばしば現れ、とくに永正から大永の16世紀初頭には、興福寺権僧正經哥が莊園の回復を企て、河内守護代遊佐順盛・三条西実隆に依頼したことなどが知られる。三つの若江莊は郡内領有した駿在莊田を郡名で呼称したとされ、その範囲は推定であるが、遊佐氏は若江城に詰めることがあり、興福寺領若江莊は若江遺跡周辺に位置した可能性が考えられる。

II 若江遺跡第83次調査地の位置と周辺の調査成果

今回調査した若江遺跡第83次調査地は、若江本町2丁目で遺跡の北東端に所在する。若江本町北公園の北西隅にある。若江北町や若江南町と比べて、調査の履歴は多くはない。近隣では、第28次調査と第77次調査が実施されている。

第28次調査は共用住宅の建設に伴い、昭和59年3月～4月に実施された。調査の結果、第4層上面と第5・6層上面の2面の遺構面を確認した。第4層上面では溝4条、第5・6層上面では井戸4基・土坑4基・溝2条・ピット18個が検出された。出土遺物の年代観から第4層上面遺構は16世紀代、第5・6層上面遺構は13世紀後半～14世紀代の所産と考えられている。調査時の現況で、第4層上面は地表面下0.5m、第5・6層上面は地表面下0.8mにあたる。

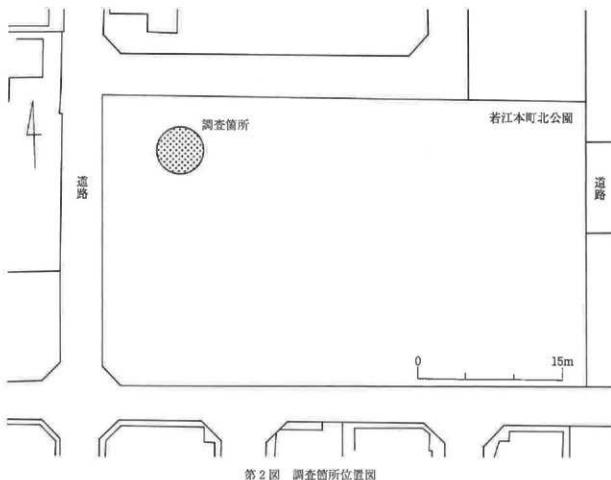
第77次調査は個人住宅の建設に伴い、平成12年7月に実施された。第7層上面で溝2条・井戸1基・土坑2基・ピット9個が検出された。調査時の現況で、第7層上面は地表面下0.5～0.6mにあたる。井戸の掘形の検出径が1.15mを測り、底部を穿った土師器鋤釜を4段積み重ね、井戸枠として転用していた。鋤釜の年代観から、井戸の築造は13世紀末から14世紀初頭・鎌倉時代後期から末期と考えられる。南西から北東に走る溝は西脇が三段に落ち、全形は幅5.8mに推定されている。溝は濠の機能を持つものと考えられる。出土遺物から14世紀前半に形成され16世紀後半に埋没したと報告されている。なお、遊離資料であるが、遺構内の出土遺物には、古墳時代前期の土師器甕・奈良時代の須恵器などが見られる。従前より指摘されているが、先の遊離資料が該当する時期の集落や寺院を整地・再編成して若江城築城前後の集落を营造していることがわかる。以上の2例から、遺構面分離の如何を問わず、今回の調査地周辺では、①13世紀末～14世紀前半、②16世紀代の2時期にわたって遺構が营造してきたことが知られる。①は若江城築城以前、②は第2期若江城に相当する。これらのことから、調査地周辺では、周辺の調査成果に沿った遺構面の広がりを確認することが期待された。

(注)・第28次調査

財團法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第28次発掘調査概報」(F(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度～1989年、所収)

・第77次調査

東大阪市教育委員会「第5章 若江遺跡第77次発掘調査」(『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報・平成12年度』、2001年、所収)

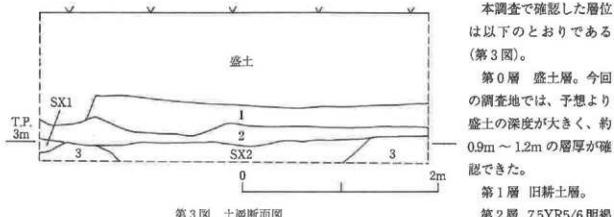


第2図 調査箇所位置図

III 調査の概要

調査は、先述した第28次調査・第77次調査のデータから、現況の地表面下0.5mから1.0mにかけて遺構面が浸透し広がることが予想されたため、原因者との協議を通じて地表面下1.5mまでを本調査の対象とした。その深度以下から防火水槽の掘削底面(約5m)までを、工事の掘削作業と併行して調査を行なうこととした。

調査トレンチは、第2図に掲げた箇所に設定された。防火水槽より一回り大きい、直径約6mの円形で、調査面積は約28m²となった。

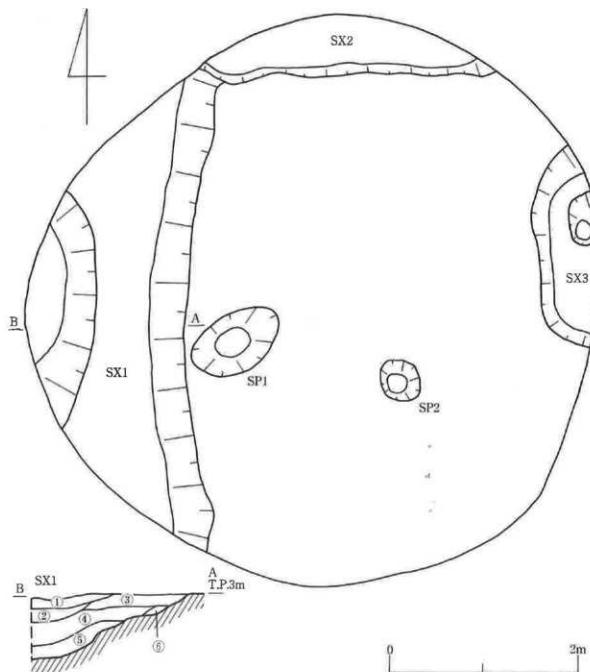


第3図 土層断面図

色砂混じりシルト。上部は堅くしまっており、第1層と対応する床土となっている。古墳時代～室町時代の遺物を少量含む(第5図)。

第3層 10YR6/4に近い黄褐色粗粒砂。上面は後述の遺構面を形成する。古墳時代前期の洪水層と考えられる。調査地では、砂層の堆積が厚く、掘削工事との併行調査では、ごく微量の土師器破片を確認したにとどまった。遺構面は、東西ラインではなく同一レベルであるのに対し、南北では、北から南へ緩く傾斜しているのが認められた。

第3層上面で溝状の落ち込み3箇所、ピット2個を検出した(第4図)。落ち込みはSX、ピットはSPと略号を使用した。



第4図 検出遺構実測図

落ち込み 調査地の北、西、東の3方向で確認した。いずれも全形は不明でごく一部の検出にとどまつたため、遺構を落ち込みと捉えた。SX1は西側で検出。検出長4.6m、最大幅1.7m、深さ1.2mを測る。傾斜面の形状から、溝状遺構の一部と考えられる。東肩は南北方向に直線的に延び、2段に落ちる。落ちの1段と2段の間、0.5~1.0mにわたり、テラス状の緩傾斜面が形成されていた。埋土は4層に区分された。①層は7.5YR6/2灰褐色粗粒砂、②層は2.5Y4/1黄灰色細粒砂、③層は2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト、④層は7.5Y3/2オリーブ色細粒シルト混じり細粒砂、⑤層は7.5Y3/2オリーブ黒色粘土、⑥層は10YR6/4に5v 黄橙色粗粒砂層(第3層)に7.5Y3/2オリーブ黒色粘土がブロック状に混入する層であった。土師器・須恵器・磁器・平瓦が出土した。築造時期については後述する。

SX2は北側で検出。検出長3.0m、最大幅0.65m、深さ0.14mを測る。南肩は東西に延びる。SX1と直交するが、堆積土や出土遺物が大きく相違することから、近代から現代にかけて築造されたものと考えられる。埋土は、旧新土層(第1層)・7.5YR5/6明褐色砂混じりシルト(第2層)の混合土に砂層を含む層であった。公園造成以前の耕作に関する遺構であろう。

SX3は東側で検出。検出長2.1m、最大幅0.7m、深さ0.25mを測る。平面の形状から土坑の一部と考えられる。断面は皿状を呈するが、トレンチの壁面近くにピット状の凹みが遺存している。ピット状の凹みは径0.6mを測る。凹みの内部には、古墳時代前期の布留式二重口縁壺(第5図9)が出土した。出土位置は正立を保っているが、他の遺構の築造時期や、図示し得ないか瓦器焼小片がSX3から出土していることからみて、二重口縁壺は混入品と思われる。埋土は5Y5/3灰オリーブ色シルトであった。築造時期は明確ではないが、同一遺構面であることからSX1と同時期と推定される。

ピット2個検出した。SP1は捨円形を呈する。長径1.0m、短径0.6m、深さ0.32mを測る。埋土は炭化物を多量に含み、N5/灰色砂混じり粘土と焼土が混入する土層であった。形状と埋土から、焼土坑と考えられる。SP2は円形を呈する。径0.4m、深さ0.14mを測る。埋土は5Y4/1灰色砂混じりシルトであった。SP1、SP2とも還物は出土しなかった。

IV 出土遺物

今回の調査で古墳時代～室町時代の遺物が出土した。瓦、土師器、瓦器、須恵器、磁器などがみられる。以下、遺構及び遺物包含層に大別して説明する。

遺構出土土器

SX1(第5図1~8)

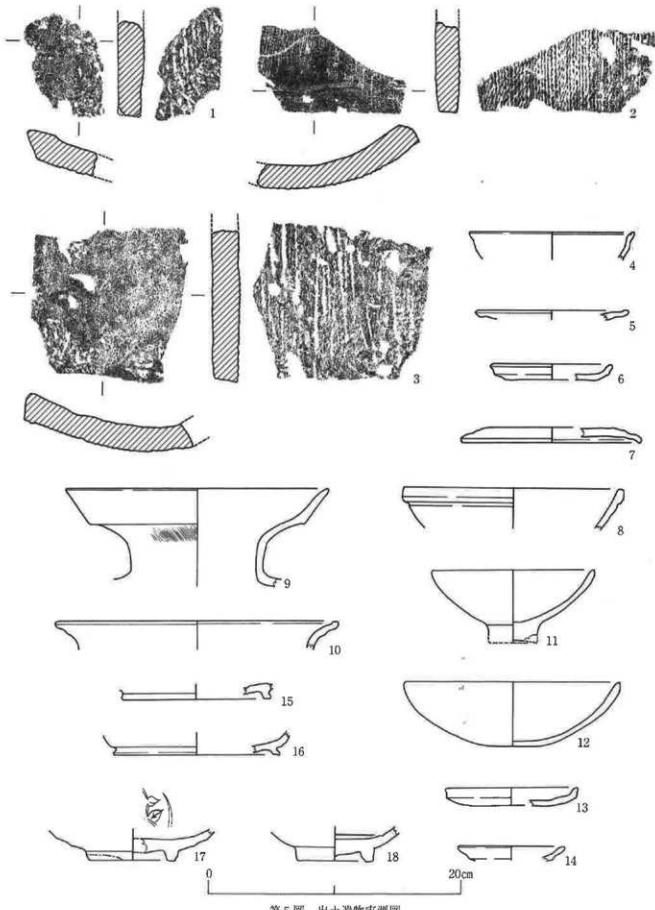
瓦、土師器、須恵器、磁器がある。

1~3は平瓦である。凸面には綱目(タタキ)がみられる。1・3は凹面に綱横8条/cm、2は6条/cmの布目がみられる。側面はケズリで面取りする。奈良時代。

4~6は土師器である。壺、皿がある。4は壺である。口縁部がやや外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁端部内面に沈線を残す。口縁部内外面をヨコナデ調整する。奈良～平安時代。5・6は皿である。5は中皿である。体部から口縁部にかけて外へ大きく崩す。口縁端部は内側にやや肥厚し、丸く終わる。内外面は風化により調整が不明である。6は小皿である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整し、他はナデ調整する。12世紀前半。

7は須恵器の蓋壺である。器高が低い。天井部は水平に伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は内折し、尖り気味に終わる。内外面を回転ナデ調整する。奈良時代。

8は磁器である。白磁の碗である。体部が外へ開き気味に伸び、口縁部は肥厚する。いわゆる玉縁状口縁である。内外面を回転ナデ調整し、施釉する。釉の色調は灰白色を呈する。12世紀前半。



第5図 出土遺物実測図

SX3（第5図9）

9は土器器である。布留式期の二重口縁壺である。頸部は筒状を呈し、口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は外上方へ開き気味に拡張し、幅広の面を持つ。口縁部外面を7本/cmのハケメ調整し、口縁端部外面をヨコナデ調整する。頸部と内面は風化により調整が不明である。古墳時代前期。

遺物包含層出土土器

第2層（第5図10～18）

10～13は土器器、14は瓦器である。10は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は内側に肥厚し、丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整する。奈良時代。11・12は鉢である。底部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。11は底部が平底である。内外面は風化により調整が不明である。12は底部が丸底である。内外面をナデ調整する。古墳時代前期。13は小皿である。体部から口縁部にかけてやや内弯し、口縁部は内弯気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内面はナデ調整。外面は風化により調整が不明である。平底、口縁部形態から、コースター状皿を目指すタイプといえる。12世紀中葉。14は瓦器の皿である。口縁部がやや外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整する。13世紀前半。

15・16は須恵器である。壺の底部と考えられる。底部は台形の高台を削りだす。内外面を回転ナデ調整する。16は高台部より下方の外面を回転ヘラケズリ調整する。奈良時代。

17・18は磁器である。碗の底部と考えられる。底部は台形の高台を削りだす。内面と高台部より上方の外面を施釉する。内外面を回転ナデ調整する。17は龍泉窯系の青磁である。見込み部に文様を施す。釉の色調は灰オーリーブ色を呈する。18は白磁である。内面に沈線がみられる。釉の色調は灰白色を呈する。17は15世紀前半、18は12世紀前半。

（注）中世期土器器の規範については、口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿とする。なお時代観は、東大阪市教育委員会『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』2002年。

財團法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第38次発掘調査報告書』1993年。

横田賛次郎・森田健「大宰府出土の輸入中國磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』、1978年。

に掲った。

V まとめ

今回の調査成果を箇条書きでまとめておきたい。

(1) 今回の調査で第3層上面のレベルはT.P.2.9m前後にあたる。第28次調査第5・6層上面レベルがT.P.3.0m、第77次調査遺構面はT.P.2.85mを測ることから、3者はほぼ同一水準の遺構面の広がりをもつ。今回の出土遺物は前代の混入品が多数を占め、遺構所屬時期は不詳の点が多いが⁴⁾、先述の遺構面レベル、第77次調査検出の溝2（濠状遺構）の発達時期から推して、16世紀代を測らない時期と考えられる。

(2) 今回の調査地を若江地域の小字図⁵⁾と対照させると、調査トレントチは「城の川」に相当する。これは第77次の調査地と同一である。現状の若江城の濠・主郭の平面推定⁶⁾では第77次調査溝2と並んで今回のSX1は最北端に位置し、流向からさらに北方に延長するものとみられる。このこともSX1の所属時期と絡んで第2期若江城⁷⁾前代の集落を再編成しつづいた証左と考えられる。いずれにしても調査周辺での調査伸展、とくに濠状遺構の広がりの追求が期待されるところである。

⁴⁾ 財團法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第25次発掘調査報告書』1987年。

⁵⁾ 財團法人大阪府文化財調査研究センター『巨摩・若江北造跡発掘調査報告・第5次』1996年。



第3層上面検出遺構掘削後状況
(南より)



SX1 掘削後状況 (北より)

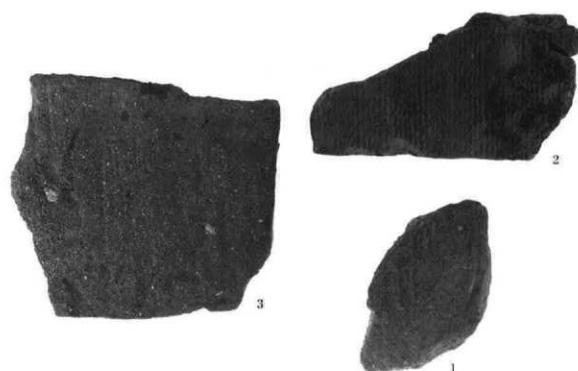


SX3 内遺物出土状況

圖版 2
遺物

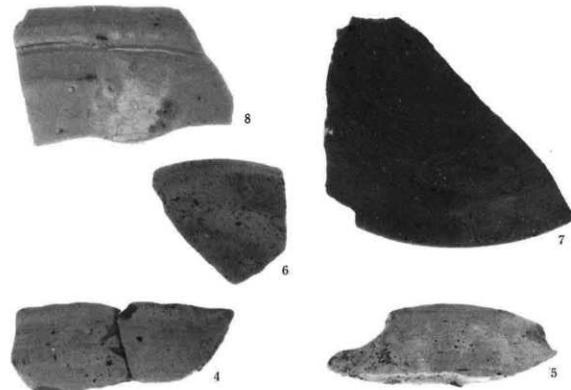


SX3 出土 土師器蓋 第 2 層出土 土師器身

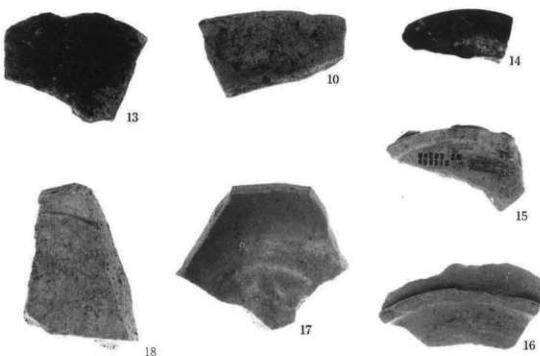


SX1 出土 平瓦

圖版 3
遺物



SX1 出土 土師器身·皿、須惠器蓋身、白磁碗



第 2 層出土 土師器身·皿、瓦器身、須惠器身底部、青磁碗底部、白磁碗底部

報告書抄録

ふりがな	たいしんせいいまうかすいそうせっちにともなう わかえいせきだい83じはつくつちょうさかいよう					
書名	耐震性防水水槽設置に伴う 若江遺跡第83次発掘調査概要					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	菅原章太（I～III・V）・釜田有理絵（IV）					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北50番地の4 TEL 06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2005年9月30日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
わかえいせき 若江遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 わかえほんまち 若江本町2丁目 地先	27227	98	平成17年 2月12日 ～ 平成17年 2月18日	28m ²	耐震性 防水水槽 設置工事
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落跡	奈良時代 ～ 室町時代	落ち込み・ ピット	土師器・須恵器 瓦器・磁器 平瓦			

耐震性防水水槽設置に伴う

若江遺跡第83次発掘調査概要

平成17年9月30日

発行 東大阪市消防局

東大阪市教育委員会

印刷 梅アズマ